

# 子どもたちも教職員も元気が出る学校運営をめざして

前ハノイ日本人学校 校長

名古屋市立白金小学校 校長 岸 山 弘

**キーワード：元気が出る学校，安全安心な学校，一人一人が生き生きとしている学校，開かれた学校**

## 1. はじめに

私がハノイ日本人学校に赴任して4ヶ月経った7月の「七夕」行事のときであった。

小学部1年の廊下を通りかかった時に、立ててあった竹に色とりどりの短冊がかけられているのを見かけた。私はふと何気なく、願いごとが書かれてある、一番手前の短冊を見た。その短冊には、「はやく にほんに かえれますように」と習ったばかりのたどたどしいひらがなでしっかりと書かれてあった。その横にある短冊にも、同じことが書かれてあった。その向こうの短冊も、・・・・私は目頭が熱くなり、ほうぜんとなり、しばらく、その場を動くことができなかつたことを今でも鮮明に覚えている。

毎日、外見上は何事もないかのように学校生活を送っている子どもたちの心の中を垣間見たような気持ちであった。この時、私はハノイ日本人学校の子どもたちが、このベトナムの地で、夢と希望をもって、元気よく、楽しい学校生活を送ることができるように、様々な条件を整備することが私の務めであるという思いを強くした。

## 2. ベトナムという国、ハノイという都市にある日本人学校

ベトナムには豊かな自然、歴史を感じさせる文化、多様な民族の営み、ベトナム戦争を生き抜いてきた国民性があり、知れば知るほど興味や関心が高くなる、魅力のある国である。また、年長者を敬う道徳心や仏教等への信仰心も厚い。町中にはいたるところに寺院があり、老若男女が手を合わせて拝んでいる姿、多くの商店や家では祭壇やお供え物等を見ることができ、日本人として共感できる風土がある。

私が接してきた多くのベトナム人は親切で、誠実であると同時に、あまり細かいことにこだわらない寛容な性格であった。また、ベトナム人は非常に教育熱心であり、保護者が子どもを学校に送り迎えをする様子や、「ティーチャーズデイ」（教師に感謝をする日）には教師に贈る花束を持っている人の姿を町のあちこちで見かけた。日本に対しては興味や関心が高く、親近感をもっているのも、私はベトナムという国は日本人にとっては好感のもてる、住みやすい国だと感じた。

ベトナムに3年間住んでみると、一口にベトナムと言ってもハノイ市を中心とする北部、ホーチミン市を中心とする南部、数多くの少数民族が住む山間部では、自然環境、社会状況、国民性などがかなり違うことが分かった。私が住んでいたハノイ市は、2000年以上の歴史をもつ街であり、歴史的遺跡や遺産がまだ数多く残されている。1010年に李朝の首都「タンロン」となり、その後、多くの王朝の首都として栄えてきた都市である。フランスから独立した後も、ベトナム社会主義共和国の首都となり、今日に至っている。ハノイ市は現在も国の政治・文化の中心地であり、「ドイモイ」といわれるベトナム政府の改革路線によって、経済的にも急速に発展している。日本をはじめ多くの外国の企業が工場や営業所を設置し、投資も活発に行われているとともに、30代までの人口が全体の60%を占めているため、ハノイ市全体の雰囲気は活気と躍動感に満ちあふれている。

こうした中で、平成8年に「在ベトナム日本国大使館付属ハノイ日本人学校」が開校し、私は10年目に当たる平成17年度に赴任した。赴任当時、学校はハノイ市西部の交通運輸大学の建物を間借りしていたが、平成18年9月、新校舎がハノイ市の中心部より西北に位置するトゥーリエム県のミーデン地区に完成した。

新校舎完成後も毎日のように日本企業関係者から子どもの転入学に関する訪問や問い合わせがあった。開校当初、13名であった児童生徒数は年々増加し、私が帰国する直前の平成20年3月には児童生徒数211名、教職員29名とい

う規模の日本人学校となった。

### 3. 基本的な学校運営方針

「ハノイ日本人学校の子どもたちが、このベトナムの地で、夢と希望をもって、元気よく、楽しい学校生活を送ることができるようにする」ためには、まず、教職員が元気でなくてはいけないと思った。それには教職員一人一人が安心して勤務し、その力を遺憾なく発揮できるように職場としての条件を整備する必要があると考えた。

そこで、次の三点を基本的な学校運営方針とし、教職員一人一人が意欲をもって勤務するための職場の条件とするとともに、子どもたち一人一人に対する教育指導の基盤とし、子どもも教職員も元気よく活動できる、楽しい学校にしたいと願った。

#### (1) 安全安心な学校

在外教育施設では特に、子どもたちはもちろんのこと、教職員にとっても学校施設面や人間関係等において、心身ともに安全で安心な場所にすることが学校運営の最低条件であり、それが元気の出る土台ともなる。

##### ① 施設が安全である学校

老朽化した大学の建物を間借りしていた旧校舎の時には毎日のように校舎の補修をしなくてはならなかった。また、現地の会社が建設した新校舎においても日本の学校建築とはかなり違うために至るところに不具合が生じたのは予想外であった。学校では校舎、運動場、体育館、プール、遊具等の施設が安全であることは子どもたちや教職員にとって絶対条件であり、毎月実施していた施設の安全点検はもとより、毎日、校舎内、運動場等を歩き回って点検しなければならず、危険箇所の早期発見、早期対応は不可欠であった。

##### ② セキュリティ体制が確立されている学校

旧校舎では白昼、堂々と校内に入り、学校の物品を持ち出そうとした窃盗事件があった。幸いにも学校行事で子どもたちは校外で活動していたので、ガードマンが犯人を取り押さえて事なきを得た。また、新校舎においても業者を装った窃盗事件があった。こうしたことから、いかにセキュリティが大切であるかを痛感し、新校舎ではガードマン・防犯カメラによる24時間監視・巡視体制、校門での来校者の厳密なチェック体制、教職員・来校者問わず校内での入校許可証着用の徹底等、セキュリティ体制に万全を期した。国内とは状況が違う海外では、不審者の侵入に対しては十分な対策を講じて、一層子どもたちや教職員の安全を守る必要があった。

##### ③ 安心して過ごすことができる学校

ある朝、担任より、「保護者から子どもが学校に行きたくないといっているので休みますという連絡がありました」という報告を受けた。住み慣れた日本を離れ、親子ともども心細い気持ちで海外に転出してきた子どもと保護者の気持ちを考えると、私はじっとしておられず、授業がある担任に替わって家庭訪問をした。そこで保護者と面談し、部屋に閉じこもっていた子どもと二人だけで話し合った。

ハノイでは日本人学校に登校できなくなれば困るのはその子ども本人だけではなく、保護者も国内以上に深刻な事態となる。子どもたち一人一人が学校は楽しい場所だと思い、安心して通える学校にすることは校長としての重要な責務の一つであると考えた。

また、子どもたちと同様に教職員一人一人も安心して勤務できるように心身の状況、人間関係にも十分に留意し、居心地のよい職場環境にする必要がある。多くの教職員、特に文科省派遣教員は海外子女教育に対する熱意をもって奉仕的精神で勤務している。しかし、管理職はそうした姿勢に甘んずることなく、心身の健康に対しては不安をできる限り減らすような配慮をしたり、勤務時間や勤務内容を適正に管理したりすることが重要である。

#### (2) 一人一人が生き生きとしている学校

子どもたちも教職員も元気よく活動できるようにするには、一人一人が活かされ、生き生きと活動できるような

教育指導、職場の環境が大切であると考えた。

#### ① 一人一人の個性（よさ）が発揮される学校

私は目の前にいる子どもたち一人一人が「将来、世界で活躍する人物になるかもしれない」、「日本とベトナムのかけはしになるかもしれない」、「日本の国際問題を解決する人物になるかもしれない」等の夢や希望を抱くようになると、自然にどんな子どもでも社会の、国の、世界の大切な宝物であり、その全人格を受け入れ、その個性（よさ）を見つけ、育てなければならないと強く思うようになってきた。

また、教職員も様々な個性（よさ）や能力を持っているので、それをできる限り発揮できるような職場にしたいと願わずにはいられなくなった。教職員一人一人の持ち味や力が生かされるような校務分掌、職務内容、職場の状況であれば、それが子どもたちにも影響し、全体として活気、活力のある雰囲気となり、子どもたちも教職員も元気が出る学校になると考えた。

#### ② もっといたくなる学校

ある日、帰国が決まった保護者が学校へあいさつに来て、「帰国が決まったのですが、子どもがハノイ日本人学校を転校するのをいやがって困っています」と言われた。私は保護者にとっては大変なこととは言え、日本人学校に転校してきた時には元気がなく、落ち込んでいた子どもの言葉だと思うと、内心うれしく感じた。

子どもたちにとって学校を楽しく、有意義な場所にするのと同様に、教職員に対しても職場の環境や条件を整え、もうあと1年でも2年でも勤めたいくなるような学校にすることが大切であると考えた。

### (3) 開かれた学校

子どもたちや教職員にとっては保護者や理事、現地関係者の方々から認められ、理解されることが一層の励みとなり、活動意欲を増すものである。そのためには日本人学校の子どもたちや教職員が共通理解をし、共通意識をもち、学校が外に向かって幅広く受け入れる土壌と情報を発信する体制をもたなければならないと考えた。

#### ① 内に開かれた学校

何かトラブルが起きた時には担任だけの問題とせず、日本人学校教職員というチームとして対応することが大切である。それはその問題が単に一担任の問題ではなく、日本人学校の課題であり、ベトナム、ハノイ市に住んでいる日本人社会の課題として受け止められる場合が多いので、日本人学校の教職員として共通理解を図り、対処する必然性が生じるからである。その問題が一部の教職員しか知らず、子どもや保護者への対応が教職員によってまちまちになってしまうような事態だけは避けなければならない。そのためには常に教職員どうしの情報交換、情報の共有化に心がけ、問題によっては十分に話し合い、できる限り結論として具体的な対応策を出すように心がけた。こうした体制をとることによって教職員は子どもたち一人一人に対して自信をもって前向きに指導し、問題に対処できると考えた。

また、そうした学校の問題は、子どもたちの学年段階や実態に応じて、できる限り子どもたちにも伝え、学校全体の問題として考えさせることも重要である。

#### ② 外に開かれた学校

学校だよりや学級だより等を少なくとも週1回発行し、全保護者に配布する（理事には学校だよりを配布する）ことによって、学校の教育方針・計画・実施内容、子どもたちの様子、学校や学級からの協力依頼事項、学校で把握した情報等を日常的に発信した。また、アンテナを高くし、絶えず保護者、ハノイ在住日本人、関係機関等からの情報を受信できるようにした。さらに、日本人、ベトナム人、外国人問わず、身元のはっきりしている訪問や依頼に対しては門戸を開き、いつでも授業、校内施設の見学を受け入れたり、関係機関の行事には積極的に参加・協力したりする体制をとった。

子どもたちには将来ベトナムという国に住んでいたという体験を何らかの形で生かすことができるようにさせたいという思いから、ベトナムに関する調べ活動に取り組みせたり、ベトナムの学校を訪問したり、ベトナムの

子どもたちを日本人学校に招待したりして、ベトナムに接する機会をできる限り多くもつようにした。子どもたちはベトナム人の子どもたちと接したり、遊んだりする機会はほとんどない環境だからこそ、日本人学校でそうした機会を設けることによって子どもたち一人一人にベトナムでの生活をできる限り前向きにとらえさせたいと考えた。しかし、交流活動を実施するには当然、その時間を確保する必要がある、そのためには、保護者に対して交流の意義、交流活動の様子、交流の成果等を学校だよりや学級だより等で知らせ、保護者の理解を得ながら進めることが重要であった。

教職員に対しても、ベトナムという国で勤めている経験を有意義なものにするために、ベトナムの学校や施設、近隣の外国人学校等における教職員との交流の場を積極的に設けるようにした。こうした機会を通して異国の教職員同士がお互いに共通した気持ち、違った意識や考え方などを知ることによって、日本人学校教職員一人一人が様々な刺激を受け、自分の職務に対する意識を高め、意欲を新たにすることができると考えた。

以上、三点の基本的な学校運営方針について、私は年度当初に教職員に説明するとともに、毎学期の終わりにはその反省の言葉を述べ、私の学校運営方針に対する理解や協力を得るように努めた。

#### 4. 所感

この3年間、学校教育目標、私自身の基本的な学校運営方針に沿って教育活動を進めていく中で、人事、施設、管理、法・規則、渉外、教育指導等に関する様々な課題、問題、事件、事故が起こった。国内ではそうした場合、教育委員会に、あるいは近隣の校長などに報告や問い合わせをすればほとんどのことは対応の仕方、解決の方法が見つかるものである。しかし、多くの在外教育施設がそうであるように、ハノイ日本人学校も諸般の事情により学校運営に関する様々な事柄について校長自身が考え、判断し、学校理事会の承認を得ながら学校運営を進めていかなければならないのが実情であった。私は考え、判断する材料がないために困惑した時に、頼りにしたのはアジア諸国の同じような境遇にある日本人学校長の方々であった。日本人学校長同士のパイプは在外教育施設を運営する上では必要不可欠であることを何度も痛感した。いろいろと情報を提供していただいたり、相談に乗っていただいたり、ある時は心温まる言葉で励ましていただいたりしたアジア諸国の日本人学校長の方々は、学校運営の実務的な責任者にとってはこの上もない大きな支えになった。

私は子どもたちや保護者に対して絶えず心がけてきたことは、子どもの指導については「親身になって骨身を惜しまない」、転出入の多い日本人学校ではその度に「転入学の子どもは心より歓迎し、卒業・転校する子どもは自信をもつように励ます」、教育指導上配慮を要する子どもやハノイで日本の教育を受けさせようと願っている保護者に対しては「手をさしのべ、支援する」という気持ちをもって学校教育を推進してきた。しかし、実際には子どもたちや保護者の方々に対して学校になじめず悩ませたり、健康・安全面で心配をかけさせたり、校舎の建築が遅れ、不安な思いをさせたりしたこともあった。また、教職員や関係者の方々からは校長としての指導力不足、配慮が至らない点を指摘していただいたこともあり、私自身が力量不足であったことを反省している。

今、思えば、私自身、3年間勤務できるか心配になり、帰国しようかと迷い、意気消沈した時期もあったが、紆余曲折の末、何とか勤めを終えることができたのも、いつも前向きな学校教職員、温かく見守っていただいた保護者、広い視野からご指導をいただいた理事会・大使館・文科省など関係者の方のご理解、ご支援、ご協力と、いつも笑顔でやさしく接してくれたベトナム人の皆様のおかげであり、そして、何よりもハノイ日本人学校の素直な子どもたちが私の大きな励みになったと実感している。

今後も、ハノイ日本人学校の子どもたち一人一人が夢と希望をもって元気よく、楽しく学校生活を送る中で「やさしく、かしこく、たくましく」(ハノイ日本人学校の校訓)成長し、将来、ハノイで過ごした期間が有意義な体験として役立つことを願っている。そして、海外で生活する子どもたちが心身共に健やかに成長し、その経験が日本の発展、世界の平和、人類の進歩、幸せに生かされることを祈っている。